資料

- ① 構成メンバー
- ② 研究プロジェクト一覧
- ③ 協力研究者一覧
- (4) 国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧
- ⑤ 国内外共同研究·研究交流一覧
- ⑥ 国立大学法人お茶の水女子大学 ジェンダー研究所規則
- ⑦ 国立大学法人お茶の水女子大学 特別招聘教授に関する規則
- ⑧『ジェンダー研究』編集方針・ 投稿規程
- ⑨ ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

【資料】①構成メンバー

[所長] 《任期》

石井クンツ昌子(基幹研究院人間科学系・生活科学部教授)

2015(H27)年10月1日~2017(H29)年3月31日

[専任教員]

足立眞理子(ジェンダー研究所教授) 2015(H27)年4月1日~

申琪榮(ジェンダー研究所准教授) 2015(H27)年4月1日~

[研究員]

小玉亮子(基幹研究院人間科学系·生活科学部教授) 2015(H27)年7月1日~2017(H29)年3月31日

棚橋訓(基幹研究院人間科学系·文教育学部教授) 2015(H27)年7月1日~2017(H29)年3月31日

斎藤悦子(基幹研究院人間科学系·生活科学部准教授) 2015(H27)年7月1日~2017(H29)年3月31日

[特別招聘教授]

スーザン・ハロウェイ(カリフォルニア大学バークレー校・教授) 2016(H28)年5月22日~2016(H28)年6月29日

エリカ・バッフェッリ(マンチェスター大学・准教授) 2016(H28)年9月20日~2016(H28)年12月20日

ラウラ・ネンツィ(テネシー大学・教授) 2016(H28)年10月3日~2017(H29)年~7月31日

[日本学術振興会外国人特別研究員]

Yoon Jiso[ユン ジソ] (カンザス大学準教授) 2015(H27)年8月10日~2017(H29)年6月10日

[特任講師]

板井広明 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

[特任リサーチフェロー]

仙波由加里 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

臺丸谷美幸 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

吉原公美 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

[アカデミック・アシスタント]

梅田由紀子 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

淹美香 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

稲垣明子 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日

和田容子 2016(H28)年4月1日~2017(H29)年3月31日



所長 石井クンツ 昌子

基幹研究院人間科学系・教授 生活科学部生活社会科学講座 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野:家族社会学、ジェンダー社会学、社会心理学

所属学会 日本家族社会学会(会長)

日本学術会議 連携会員/統計データアーカイブ分科会(副会長) 日本社会学会(理事)/社会学教育委員会(副委員長)/国際発信強化特別委員会 日本家政学会家族関係部会(役員)/(編集委員) 福井県男女共同参画審議会(会長)

National Council on Family Relations

主な業績

《著書・論文・報告書》

- 2017 「『育メン』とは何か: 父親の育児参加の意味を探る」、小崎恭弘、松本しのぶ、田辺昌吾(編) 『父親の子育てを支援する』 (別冊発達) ミネルヴァ書房
- 2017 「家族」、松本悠子(編)『アメリカ文化事典』丸善
- 2017 「地域の中の男女恊働 | The Community, 158:12-55.
- 2016 編著『男性の育児参加を促進する要因: 育児休業取得者へのヒアリングから見えてくること』一般財団法人 第一生命財団

《講演•報告等》

- 2016 「男性の育休取得の意義:ポジティブ社会学の見地から」、ファザーリングジャパン、2016年5月12日
- 2016 葛飾区区民大学「ママのための女性学:子育て中でも自分らしく」、2016年5月20日
- 2016 鎌倉市議会「地域から考える男女共同参画社会の現在と近未来の課題」2016年6月1日
- 2016 福井県みらいきらりプログラム「ワーク・ライフ・バランス」、2016年7月22日
- 2016 基調講演「Hope and Happiness in Mothering and Fathering」、世界家政学会大会、テジュン(韓国)、2016 年8月1日
- 2016 「統計からみた父親の育児休業」、日本家族社会学会大会、2016年9月10日
- 2016 Ji Young Kim, Masako Ishii-Kuntz and Suping Huang, "Changes in Population Structure and Singe-Person Households". In the International Conference "Hope and Despair in Three East Asian Cities: Generations and Classes in Shanghai, Seoul, and Tokyo". Institute for Social Development and Policy Research, Seoul National University. 2016.10.1
- 2016 基調講演「Parenting Education in Home Economics: What can "positive" approaches do?」、韓国家政教育学会、2016年11月5日
- 2016 「父親の育児・子育て参加:日本の場合」、日仏会館、2016年11月24日
- 2017 葛飾区区民大学「ママのための女性学:子育て中でも自分らしく」、2017年1月19日
- 2017 浩志会「男女共同参画社会の現在と近未来の課題:女性の社会進出と男性の家庭内役割に注目して」 2017年3月22日

《競争的資金》

・ 科学研究費基盤研究 A「IT 社会の子育てと家族・友人関係:日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」、2014~2018 年度、研究代表者



専任教員(教授) 足立 眞理子

博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野:経済理論、国際経済学、フェミニスト経済学

所属学会等: 日本学術会議連携会員(経済学部会)

経済理論学会(幹事・奨励賞選考委員会委員長)

経済学史学会

日本フェミニスト経済学会(幹事)

国際フェミニスト経済学会

大阪府立大学人間科学研究科女性学研究センター学外研究員

主な業績

《雑誌•論叢》

- 2017 「序――新自由主義と社会的再生産のジェンダー分析」『ジェンダー研究』、第 20 号(ジェンダー研究所 年報 通券 37 号)、1-3 頁
- 2016「フェミニスト経済学の現在:「金融化とジェンダー」をめぐる方法的考察」、『季刊 経済理論』経済理論学会編 53 巻(3), 7-22, 桜井書店
- 2016「資産、地租以及女性——対地租資本主義的女権視角分析」、孟捷編『政治経済学報(第7巻)』中国社会科学院社会科学文献出版社

《シンポジウム報告等》

- 2016 シンポジウム「イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて」、東京大学東洋文化研究所、第三部「共同研究への期待」コメント、2016年6月11日
- 2016 IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール』」、お茶の水女子大学ジェンダー研究所(IGS)、ディスカッサント、2016 年 7 月 29 日
- 2016 「お茶の水女子大学におけるジェンダー研究の軌跡:今ここで、問うこと・問われること」、国際ジェンダー学会 2016 年大会シンポジウム「大学におけるジェンダー研究センターの来し方・行く末を考える」、一橋大学、2016 年 9 月 10 日
- 2016 国際シンポジウム「移住・家事労働者の権利保障と ILO189 号条約:アジア、ヨーロッパ、アメリカ、そして 日本」、セッション 4「Case of Japan」モデレータ、一橋大学、2016 年 12 月 10~11 日
- 2017 IGS セミナー「日本における女性と経済学」、お茶の水女子大学ジェンダー研究所(IGS)、ディスカッサント、2017年2月22日
- 2017 「銘仙と『入れ子状の近代』:逸脱への欲望」、国際シンポジウム「モダン再考:戦間期日本の都市・身体・ジェンダー」、ストラスブール大学、2017 月 3 月 25 日



専任教員(准教授) 申 琪榮

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース 生活科学部生活社会科学講座

専門分野: 比較政治学(東アジア)、ジェンダーと政治、フェミニズム理論、最近の 研究分野は、政治分野におけるジェンダー・クオータと代表性、比較女 性運動、ジェンダー主流化政策など。

所属学会等 International Political Science Association

American Political Science Association

European Consortium for Political Research

International Feminist Economics Association

日本政治学会(分野別研究会「ジェンダーと政治研究会」)

日本比較政治学会

日本フェミニスト経済学会

日本社会政策学会

ソウル大学日本研究所『日本批評』海外編集委員

韓国ジェンダー政治研究所研究委員

ソウル大学 SSK (Social Science Korea) 東アジア地域秩序研究会共同研究員

主な業績

《論文・共著・その他》

- 2016 "Gender Quota and Candidate Selection Processes in South Korean Political Parties," *Pacific Affairs: An International Review of Asia and the Pacific*, Vol. 89, No. 2, June, pp. 345-369 (with Hyunji Lee, SSCI) DOI: http://dx.doi.org/10.5509/2016892345
- 2016 「글로벌 시각에서 본 일본군'위안부'문제: 한일관계의 양자적 틀을 넘어서(Rethinking the Japanese Military 'Comfort Women' Issue from a Global Perspective: Beyond Korea-Japan Bilateral Relations),『일본비평: Korean Journal of Japanese Studies』15호, pp. 250-279.
- 2016「'개인적인 것이 정치적인 것이다': 선택적 부부별성(夫婦別姓)과 이름의 정치학 ('The Personal is Political': Fufubessei and the Politics of Women's Names), 권인숙, 김효진, 지은숙 편, 『젠더와 일본사회 (Gender and Japanese Society)』, 한울출판사, pp. 64-99.
- 2016 「ヒラリー・クリントンの敗北をどう理解すべきか」『女たちの 21 世紀』88 号、23-25 頁
- 2016 「【シンポジウム】国際社会のなかの「慰安婦」問題:指定質問」『女性・戦争・人権』14号 31-32 頁
- 2017 書評『海を渡る「慰安婦」問題—右派の「歴史戦」を問う』、『ジェンダー研究』第 20 号、お茶の水女子大 学ジェンダー研究所、155-157 頁

《学会報告》

2016 "Kantian Peace Model on the Test: The Revision of Japan's Peace Constitution," Association for Asian Studies in Asia, June 24-27, Kyoto, Japan (with Eun-jeong Cho)

- 2016 "Gender, Representation, and Quality of Democracy," International Political Science Association, July 23-28, Poznan, Poland
- 2016 "Challenges and New Strategies of Women's Local Party in Japan: What Does It Represent and How Does It Sustain Its Electoral Success?" American Political Science Association, September 1-4, Philadelphia, USA

《公開講演・シンポジウム報告》

- 2016 女性参政権 70 周年記念シンポジウム「女性を議会へ 本気で増やす!」第 2 セッション「東アジアの躍進に学ぶ:韓国・台湾の女性議員はなぜ増えたのか」企画・モデレータ、上智大学(2016年4月10日)
- 2016 韓国ソウル大学日本研究所「共同企画研究シンポジウム: 脱戦後思想と感性」発表「グローバル視点からみた「日本軍慰安婦」問題:日韓関係の両者枠組みを超えて」、ソウル大学日本研究所(2016年5月6日)
- 2016 年第 1 回 GDRep 政党行動と政治制度セミナー「持続可能な女性の政治代表性は得られるのか?:2016年の韓国総選挙とクオータ制の15年」、上智大学(2016年6月22日)
- 2016 北海道教育大学函館校 第2回ジェンダーカフェ講演「ジェンダー・クオータ:21 世紀型女性参政権の実現のために」、北海道教育大学函館校(2016年6月28日)
- 2016 くるめフォーラム 2016 講演「女性議員を増やそう: ジェンダー・クオータ制を目指して」、久留米市男女平 等推進センター(2016年10月1日)
- 2016 アジア女性資料センター秋の連続セミナー「韓国初の女性大統領: 誕生と迷走」、上智大学(2016 年 11 月 22 日)
- 2016 選択的夫婦別姓を実現する会・富山 記念講演会「2005 年韓国家族法改正を振り返る:保守の反対論をどう乗り越えたのか?」、富山市サンフォルテ 307 研修室(2017 年 3 月 12 日)

《競争的資金(国内·海外)》

- ・ 科学研究費基盤研究 C「女性大統領と女性の政治的代表性:韓国の朴槿惠を中心に」、2014~2017 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 C「女性の政治参画:制度的・社会的要因のサーベイ分析」研究代表者:三浦まり(上智大学)、2015~2017 年度、研究分担者
- ・ 科学研究費特別研究員奨励費「日本の地方政治における女性の政治的代表制の研究」、2015.10.9~2017.3.31、受入研究者(外国人特別研究員: Yoon Jiso)
- 韓国研究財団 一般共同研究「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因研究:韓国、日本、台湾比較分析」、2016.11~2018.10年度、研究分担者
- Social Science Korea. "East Asian International Relations Theory" 研究代表者: Jae Sung Chun (Seoul National Univeristy)、2015~2018 年度、研究分担者



特任講師 板井 広明

専門分野: 社会思想史、経済学史、食の倫理とジェンダー

所属学会: 経済学史学会(編集委員)

日本イギリス哲学会(幹事)

社会思想史学会 政治思想学会

日本フェミニスト経済学会

日本有機農業学会日本経済理論学会

【担当業務】

- ・研究プロジェクト「食の倫理と功利主義:食をめぐる規範・実践・ジェンダー」(20 頁参照)
- ・研究プロジェクト「利己心の系譜学」(21 頁参照)
- ・研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」(36 頁参照)
- ・国際教育プログラム「AIT ワークショップ」(128~133 頁参照)
- ・大学院講義科目「国際社会ジェンダー論」演習(128~133 頁参照)
- ・国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」コーディネーター・司会・運営(50~52 頁参照)
- ・国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?」運営統括(62~64 頁参照)
- ・IGS セミナー「日本における女性と経済学」企画・コーディネーター・司会・運営(93~94 頁参照)
- ・IPS 10 『国際シンポジウム「金融化、雇用、ジェンダー不平等」』編著(141 頁参照)
- ・ IGS ランチョンセミナー企画運営(102 頁参照)
- ・ IGS 運営会議陪席メンバー
- ・ IGS-IGS 国際シンポジウム 2018 準備委員会メンバー(1、3 頁参照)
- ・ウェブサイト・SNS・メーリングリスト等による情報発信・広報(148~149 頁参照)
- ・シンポジウム・セミナー・研究会ポスター作成(46~49 頁参照)
- ・情報機器・ネットワーク管理

主な業績

《書籍》

2017 板井広明「功利主義と政府」、菊池・有賀・田上編『政府の政治理論:思想と実践』晃洋書房、119-134、2017年3月

《論文•共著》

2016 Hiroaki Itai, Akira Inoue and Satoshi Kodama, "Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical Utilitarianism", *The Tocqueville Review/La revue Tocqueville*, University of Toronto Press, vol.37, no.1, 2016 June, 81-98.

《学会報告等》

2016 「古典的功利主義における多数と少数」、現代経済思想研究会(下関市立大学)、2016年12月

2016 経済理論史研究会「初期ミルにおける女性論と文明社会論:「結婚論」を中心に」、討論者、2016年10月22日

《競争的資金》

- ・ 科学研究費基盤研究 C「食の倫理と功利主義: 食をめぐる規範・実践・ジェンダー」、2012~2016 年度、研究代表者
- ・ 科学研究費基盤研究 B「利己心の系譜学」研究代表者:太子堂正称(東洋大学)、2015~2017 年度、研究 分担者



特任リサーチフェロー 仙波 由加里

専門分野: 倫理学、バイオエシックス、ジェンダー、

生殖技術に関連する倫理的問題

所属学会:日本医学哲学・倫理学会(国際誌編集委員)

日本生命倫理学会 日本臨床倫理学会 日本生殖看護学会

European Society of Human Reproduction and Embryology (ESHRE)

【担当業務】

- ・研究プロジェクト「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」(30 頁参照)
- ・研究プロジェクト「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(31 頁参照)
- ・ 研究プロジェクト「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」(32 頁参照)
- ・研究プロジェクト「人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究」(33 頁参照)
- ・IGS 関連研究会「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」(124 頁参照)
- IGS セミナー(生殖領域シリーズ)企画・コーディネーター・司会(69、75、83 頁参照)
- ・IPS 9『The Ethics of Prenatal Testing』編著 (141 頁参照)
- ・海外からの問合・訪問者対応

主な業績

《著書:論文》

2016 翻訳『わたしたちのかぞくのものがたり』(eブックhttp://www.efamart.de/en/books-for-children/)、FamART (ドイツ) (原著: Petra Thorn and Lisa Herrmann-Green, with Illustration by Tiziana Rinald, *The Story of our Family*)

《学会報告·講演》

- 2016 講演「海外の DI 事情 ドナーの匿名性はもう保障できない」、第 34 回すまいる親の会・AID で子を持つ親および AID を検討するカップルのためのセミナー、2016 年 5 月 23 日
- 2016 「第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題」、東邦大学生命倫理シンポジウム講演、 2016年7月2日
- 2016 「第三者の介入する生殖医療をとりまく倫理的・社会的問題」、臨床死生学・倫理学研究会(東京大学・ 上廣死生学講座)講演、2016 年 7 月 13 日
- 2016 講演「生殖医療をめぐる動き:子どもができにくい時代の中で」、厚木稲門会レディースの会、2016年11月11日
- 2016 「精子ドナーの匿名性をめぐる問題:諸外国の状況を踏まえて」、第28回日本生命倫理学会年次大会報告(査読あり)(報告:仙波・久慈・清水)、2016年12月4日
- 2017 「AID 児への Telling を前向きに検討・実施している親の課題及びニーズ」(報告: <u>清水</u>・久慈・仙波)、日本生殖心理カウンセリング学会、2017 年 2 月 18 日
- 2017 「生殖心理カウンセリングの倫理を考える」、生殖心理カウンセラー継続研修会コメンテータ、日本生殖心理カウンセリング学会、2017年2月18日

《競争的資金》

・ 科学研究費基盤研究 C「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」、 2016 年~2018 年、研究代表者:清水清美(城西国際大学)、研究分担者



特任リサーチフェロー 臺丸谷 美幸

専門分野: ジェンダー学、アメリカ史(アジア系アメリカ人史)、アメリカ研究

所属学会:日本アメリカ学会(JAAS)

日本移民学会 ジェンダー史学会

アジア系アメリカ人研究会(AALA)

情報文化研究会(AIC)(運営委員·学術誌編集担当)

Association for Asian American Studies (AAAS)

【担当業務】

- ・年報『ジェンダー研究』編集事務局(136 頁参照)
- ・研究プロジェクト「朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題」(37 頁参照)
- ・研究プロジェクト「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」 (38 頁参照)
- ・研究プロジェクト「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入: ジェンダーとエスニシティの視点から」(39 頁参照)
- ・IGS 関連研究会「冷戦とジェンダー」研究会、代表・企画・運営・報告(79、95、124 頁参照)
- ・IGS セミナー「ポスト新自由主義の未来を想像する」コーディネーター、運営(73 頁参照)
- ・ IGS セミナー「訳者と語る『京城のモダンガール』」および「書評会」企画・運営・報告(77 頁参照)
- ・IPS 11『IGS セミナー報告書訳者と語る「京城のモダンガール: 消費・労働・女性からみた植民地近代」』編著 (141 頁参照)

主な業績

《学会発表·講演等》

- 2016 招待講演"Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian *Nisei* Soldier in the Korean War in *From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada*" Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, 2016 年 9 月 23 日
- 2016 招待講演「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験:ポストコロニアル的視座からの検討」、ポストコロニアル 法理論研究会、第4回研究会、明治大学、2016年11月21日
- 2016 「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」、ジェンダー史学会第13回年次大会報告(査読あり)、武蔵大学、2016年12月18日

《競争的資金》

- ・ 竹村和子フェミニズム基金助成、研究課題「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」2015 年度(2015.7~2016.6)、研究代表者
- ・ 科学研究費若手 B「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」、2016 ~2018 年度、研究代表者



研究員 棚橋 訓

基幹研究院人間科学系・教授 文教育学部人間社会科学科教育科学コース 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 開発・ジェンダー論コース 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 文化人類学、オセアニア地域研究、ジェンダー文化論、 セクシュアリティ研究

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー



研究員 小玉 亮子

基幹研究院人間科学系·教授 生活科学部発達臨床心理学講座 博士前期課程人間発達科学専攻 博士後期課程人間発達科学専攻

専門分野: 子ども社会学、教育学

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後 70 年」とジェンダー史」: 地域のジェン ダー実践を思考の手がかりに」運営コーディネーター



研究員 斎藤 悦子

基幹研究院人間科学系・准教授 生活科学部生活社会科学講座 博士前期課程ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース 博士後期課程ジェンダー学際研究専攻 ジェンダー論領域

専門分野: 生活経済学、生活経営学、企業文化論

主な担当業務:

ジェンダー研究所運営委員会メンバー 研究プロジェクト「アジアにおける『新中間層』とジェンダー」メンバー 研究プロジェクト「社会的企業とジェンダー」メンバー

【事務系スタッフ】



特任リサーチフェロー 吉原 公美 主な担当業務:

ジェンダー研究所事務局統括 ジェンダー研究所・グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授招聘事務 ジェンダー研究所特別招聘教授業務活動支援 ジェンダー研究所全体予算管理 各種報告書・報告データ作成 国際シンポジウム等運営 ほか



アカデミック・アシスタント 梅田 由紀子

主な担当業務:

文献収集・資料整理・附属図書館収蔵資料管理 AIT ワークショップ事務補佐 研究所事業事務 シンポジウム等運営事務・マニュアル作成 会計処理 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 滝 美香 主な担当業務:

研究所事業事務 シンポジウム等運営事務 会計処理 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 稲垣 明子 主な担当業務:

研究所事業事務 シンポジウム等運営事務 会計処理 書類作成・書類整理 ほか



アカデミック・アシスタント 和田 容子 主な担当業務:

研究所事業事務 シンポジウム等運営事務 事業報告書等刊行物編集 事業成果等原稿校閲 ほか

【資料】②研究プロジェクト一覧(『ジェンダー研究』第 20 号彙報より転載)

(I)経済とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「アジアにおける『新中間層』とジェンダー I研究

【研究担当】足立眞理子(IGS 教授)

【メンバー】斎藤悦子(IGS 研究員/本学准教授)、堀芳枝(恵泉女学園大学准教授)、 グレンダ・ロバーツ(早稲田大学教授)、スーザン・ヒメルヴァイト(英・オープン大学名誉教授)

【研究内容】

アジアにおける『新中間層』研究のための理論的作業と、継続している実証研究のまとめを行った。とりわけ、2008年グローバル金融危機以降のアジア経済社会において、金融化とジェンダーの問題が喫緊の課題として浮かび上がっている。しかしながら、従来、金融化とジェンダーの関連は、理論的構成を含めほとんど研究されていない。そこで、フェミニスト経済学の「金融化とジェンダー」の最新知見を整理・統合することを試みた。

金融化の定義は、今日、ポストケインジアン派のミンスキー理論により、金融不安定性の問題に焦点が当てられている。これらの理論と従来のフェミニスト経済学が理論化してきた、メゾレベル分析の関連性が指摘されている。これらについて、詳細に検討するとともに、日本の現状についても資料収集とインタビュー調査を実施した。(本報告書 18 頁参照)

IGS 研究プロジェクト「社会的企業とジェンダー」研究

【研究担当】足立眞理子(IGS 教授)

【メンバー】斎藤悦子(IGS 研究員/本学准教授)、スーザン・ヒメルヴァイト(英・オープン大学名誉教授)

【研究内容】

社会的企業の定義に関して、イギリスの文献や事例研究を行った。

社会的企業と近年注目されてきているシェアリング・エコノミーの関連について研究会を開催し、議論を行った。 貨幣経済、市場交換、債権・債務関係等の従来の概念が市場経済を中心として定義されていることを確認し、 非市場的諸要素が市場交換に代替する可能性や、企業活動が必ずしも利潤確保を目的としない場合の組織 維持について分析した。(本報告書 19 頁参照)

科学研究費基盤研究 C「食の倫理と功利主義:食をめぐる規範・実践・ジェンダー」

研究課題番号 24530214:平成 24(2012)~平成 28(2016)年度

【研究担当】板井広明(研究代表者·IGS 特任講師)

【研究内容】

本研究の概要は、功利主義的な食の倫理の研究の視点から昨今の食の倫理論を整理し、あるべき食の倫理の提示を行なうことにある。研究は2本立てで、第1は18世紀英国における人間と動物の区別・位置づけという思想史的考察を行なう。第2は英米日の新たな食のネットワーク作りや運動の実態と特徴を比較しつつ、食と農、食と環境、ジェンダーの問題から規範的な食の倫理を検討し、現代のグローバルな経済社会における望ましい食の倫理を提案するものである。

今年度は改めてロンドン大学(University College London)所蔵のベンサム草稿にあたるとともに、受刑者の社会復帰プログラムとして食を位置付けるロンドン近郊の Brixton 刑務所での実践や、愛知県の福津農場など自然農法を実践している現場を参与観察し、食の倫理の問題圏の広さを確認した。

今後は規範的な食の倫理と農の現場での実践とをどう接合するかに焦点を合わせつつ、食の倫理の社会経済的な基盤について研究を広げる予定である。(本報告書 20 頁参照)

科学研究費基盤研究B「利己心の系譜学」

研究課題番号 15H03331:平成 27(2015)~平成 29 (2017)年度

【研究担当】板井広明(研究分担者·IGS 特任講師)、太子堂正称(研究代表者·東洋大学准教授)

【研究内容】

経済学が前提とする利己心という人間行動の基本動機を、歴史的・現代的文脈の中で根本的かつ総合的に 分析し、その可能性と限界を見定め、現在の経済理論にそれをどのように反映させるか、あるいは競争の是非と いった議論をいかに深めるかが、本研究の課題である。

今年度は、5月21日に東北大学で開催された経済学史学会で本研究プロジェクトの企画セッションを行ない、編者のひとり W. Hands 氏と英文論集出版に関する打ち合わせを行なった。また11月には、東洋大学(11/12)と 関西大学(11/19)で研究集会をもち、編者のひとり Uskali Mäki 氏と出版打ち合わせなどを行なった。

2017 年 2 月には出版契約も済んだので、英文論集完成に向けて次年度は自らのペーパーをブラッシュアップする時期となる。(本報告書 21 頁参照)

(Ⅱ)政治とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究

【研究担当】申琪榮 (IGS 准教授)

【メンバー】政治代表におけるジェンダーと多様性研究会 (GDRep)、Yoon Jiso (日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学準教授)、大木直子 (本学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【研究内容】

■概要

東アジアは世界的に注目される経済発展を成し遂げた地域であるが、政治的民主主義の発展経路は統一ではない。とりわけ、女性の政治参画は、民主主義の歴史が長い日本において最も低い。他方で台湾は民主化以前から女性議員の割合が高く、民主化以降は3割をはるかに超えるようになった。韓国も、2000年代に入って十数年間女性議員が国会・地方議会において著しく増加した。これら東アジア国家において女性の政治的代表性を高める・妨げる要因は何か、また、ジェンダー・多様性を生かした政治制度はどのように形成されうるのか。本研究は、これらの課題に取り組み、日本、韓国、台湾における男女議員への調査を実施、比較分析し、相違点を明らかにすることを目的とする。

■研究内容・今年度の成果

- 1. 国際シンポ後援:「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」(上智大学、2016 年 4 月 10 日)。
- 2. GDRep 研究会: 「持続可能な女性代表性は得られるのか?―2016 年の韓国総選挙とクオータ制度の 15 年」申琪榮報告(上智大学、2016年6月22日)。
- 3. IGS セミナー: 「台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開」福永玄弥報告 (2016 年 12 月 12 日、アジア女性資料センターと共催)。
- 4. 日本の国会議員(男女)を対象としたサーベイ質問表を集計、衆参議員 16 名にインタビュー実施。

5. 韓国の研究者らと打ち合わせ、質問表の韓国版作成、2017年2月に訪問アンケート実施。このため、韓国研究財団の「一般共同研究」(2016.11~2017.10) に応募し、採択された。

■次年度への展望

2017 年度は、日本の国会議員を対象として前年度に行ったサーベイ調査及びインタビュー資料を分析する。韓国においては、韓国研究チームの協力のもと、アンケートの集計及びインタビューを実施する予定。その結果を持って論文の執筆を始める。一部日本、韓国のデータに基づき、ヨーロッパ、韓国の学会報告を予定している。さらに、台湾研究チームと打ち合わせし、台湾調査の準備を進める。(本報告書24頁参照)

科学研究費基盤研究C「女性大統領と女性の政治的代表性:韓国の朴槿恵を中心に」

研究課題番号 26360042:平成 26(2014)-平成 29(2017)年度

【研究担当】申琪榮(研究代表者·IGS 准教授)

【研究内容】

■概要

韓国では2012年の選挙で保守政党の女性大統領(朴槿惠)が誕生した。保守政権は伝統的なジェンダー規範を支持し、政治における女性の実質的な代表性(women's substantive representation)を損ないかねないと指摘されてきたが、朴槿惠は「女性」を選挙のキーワードにして戦い、当選した。本研究は、朴槿惠大統領の在任期間を研究期間とし、朴政権の女性関連政策、政治制度、及び国政選挙(2016年)における政党の選挙戦略の変化を考察することで、保守政権の女性大統領が女性の実質的な政治代表性にどのような影響を及ぼしうるのかを考察する。

■ 研究内容と今年度の成果

- 1. 学会発表: IPSA (International Political Science Association) (2016.7. Poznan Poland) 研究発表。
- 2. 一般公開講演:「パク・クネ:初の女性大統領の誕生と迷走」(2016.11.上智大学)
- 3. 2015 年 10 月から 2016 年9月までソウルにて在外研究。韓国にてフィールドワーク実施。専門家及び女性 団体関係者と面談。
- 4. 朴槿惠政権のジェンダー政策(特に慰安婦問題関連)について『日本批評』15 号へ論文投稿。

■ 次年度以降の展望

2017 年度は、最終年度になるため、主に成果発信に取り組む。具体的には、英語雑誌に投稿する論文を執筆するとともに、女性大統領(総じて政治的リーダー)のあり方と政治的代表性をテーマに国際シンポジウムを企画する。(本報告書 25 頁参照)

科学研究費基盤研究 C「女性の政治参画:制度的・社会的要因のサーベイ分析」

研究課題番号 15K03287: 平成 27(2015) ~平成 29(2017) 年度

【研究担当】申琪榮(研究分担者・IGS 准教授)、三浦まり(上智大学教授・研究代表者)

【研究内容】

■ 概要

政治代表における男女不均衡(女性の過少代表/男性の過大代表)はなぜ引き起こされ、どのように再生産されてきたのかを明らかにすることを目的とする。女性の政治参画を規定する制度的社会的要因を解明し、どのような制度改革と規範形成が過少代表の解消につながるかを明らかにするため、日本・韓国・台湾・ニュージーラ

ンドを比較分析する。

■ 研究内容と今年度の成果

- 1. 国際シンポジウム開催:「女性参政権 70 周年記念シンポジウム 女性を議会へ 本気で増やす!」(上智大学 2016 年4月 10 日)、申琪榮2部司会。
- 2. 研究会開催:「政党行動と政治制度」セミナーシリーズを今年も続けて 1 回行った [第9回持続可能な女性 代表性は得られるのか?:2016年の韓国総選挙とクオータ制度の15年]、申琪榮報告(上智大学、2016年6月)
- 3. 日本の国会議員サーベイ質問表の集計、インタビュー実施
- 4. 4月の国際シンポジウムの内容を起こし出版に向けて整理。

■ 次年度以降の展望

2017年度は、回収した日本の国会議員に対するアンケートを分析、インタビューを起こして論文執筆に取り組む。 日本の研究結果は、2017年度 ECPG(European Conference on Politics and Gender)で報告予定。また、次年度も引き続き、政党行動と政治制度について専門家をお呼びしてセミナーを続けるほか、「東アジアにおける政治とジェンダー」IGS 研究プロジェクトチームとの共催セミナーも開催する。韓国のアンケートも実施予定。(本報告書 26 頁参照)

学術振興会特別研究員奨励費「日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究」

研究課題番号 15F15741:平成 27 (2015)年 10 月~平成 29(2017)年 3 月

【研究担当】申琪榮(研究代表者・IGS 准教授)、Yoon Jiso(研究分担者・日本学術振興会外国人特別研究員/ カンザス大学準教授)

【研究内容】

■ 概要

本研究は女性議員がもっとも多い東京都議会を事例として、政党は女性議員を増やすためにどのような戦略を取り上げているのか、そして、その結果として選出された議員は女性の利益をどのように代表しているのかを分析している。

■ 今年度の実施状況と成果

今年度の主な研究活動は次の通りである。2000 年代以来、東京都議会の会議録(本会議・委員会)を検討し、女性の利益に関する政策トピックは何であり、誰(議員性別・政党)がこのような政策トピックに言及するのかに関してデータを集めた。そして、その結果を学会で発表した。まず、2016 年の 6 月 24-27 日には日本・京都で開催された Association for Asian Studies Asia で、その後、2016 年 7 月 23~28 日にはポーランド・ポズナンで開催された International Political Science Association Meeting で日韓女性の政治代表性に関する比較研究論文を発表した。その後、学会のパネリストからもらったコメントや指摘を反映して論文を書き直し、国際ジャーナルに投稿した。

■ 次年度への抱負、展望

今後は、東京都議会での女性利益の代表性に関する分析を深めようと考えている。具体的には、東京都議会 現職の議員たちへのインタビューを行い、政党や議員たちが理解している女性利益というものは何かを探求する。そして、2017 年の 6 月 6~8 日にはスイス・ローザンヌで開催される European Conference on Politics and Gender で、その後、2017 年 6 月 24~27 日には韓国・ソウルで開催される Association for Asian Studies Asia で 研究論 文を発表する予定である。(本報告書 27 頁参照)

(Ⅲ)生殖とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「第三者の関わる生殖医療で出生する子どもの福祉と社会における多様な家族のあり方の受容との関係性」

【研究担当】仙波由加里(IGS 特任 RF)

【研究内容】

上記プロジェクトは、東京医科大学の久慈直昭教授と、城西国際大学の清水清美教授と3人ですすめている「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」と合同で実施した。2016 年度は「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」で全5回の公開セミナーを開催したが、6月8日「AID 出生者のドナー情報を得る権利」(報告者:久慈直昭、仙波由加里、参加者22名)、7月27日「同性カップルの家族づくりと AID」(報告者:東小雪、青山真侑、参加者80名)の2回をIGSセミナー(生殖領域)としてお茶の水女子大学内で実施した。残り3回の公開セミナーは、8月30日、10月12日、12月14日に東京医科大学で開催した。この他、久慈、清水とともに、国内のAIDドナーやAIDで子どもを持ったヘテロカップルの親およびLGBTの親たちを対象にインタビュー調査も実施し、第28回日本生命倫理学会年次大会および第14回日本生殖心理学会でその調査結果を報告した。また学会誌『生命倫理』と『日本生殖看護学会誌』にも投稿中である。本研究および研究会は次年度も継続して行っていく。

さらに、11 月 10 日はモナシュ大学のキャサリン・ミルズ氏と東京大学の武藤香織氏をスピーカーとして招き、お茶の水女子大学の石田安実をコメンテーターとして、「The Ethics of Prenatal Testing」というテーマで英語セミナーを開催した。参加者は 12 名で、本セミナーの内容は、報告書としてまとめ、3 月に発行。(本報告書 30 頁参照)

科学研究費基盤研究C「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」 研究課題番号 16K12111: 平成 28(2016)-平成 30(2018)年度

【研究担当】仙波由加里(研究分担者·IGS 特任 RF)、清水清美(研究代表者·城西国際大学教授)

【研究内容】

城西国際大学の清水清美教授が研究代表者である平成 28 年度(2016 年)から 30 年度(2018 年)の文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)「AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教材作成に関する研究」(課題番号:16K12111)の研究分担者として、AID 関係者へのインタビューや文献調査を中心に研究をすすめてきた。本年度は、国内では AID で子どもを持った親や、レズビアンで AID を利用して子どもを持った親、精子提供をした医師やゲイの男性にインタビュー調査を行った。2017 年2月下旬から3月上旬にかけては、本研究の一環として、カンタベリー大学のケン・ダニエルズ氏の協力を得て、ニュージーランドのクライストチャーチ、ネルソン、オークランドで、AID 当事者や関係者たちにインタビュー調査を実施し、さらに現地にてAID 当事者への告知のための資料等を収集する。そして次年度は、本調査にて得られた情報をもとに、AID で子どもを持った親や、AID を利用しようと考えるカップル、また AID にかかわっている専門家に向けた AID で生まれた人の『出自を知る権利』を保障するための教育的目的を持つ教材作成に取り組む。さらに 2018 年の欧州生殖学会(ESHRE)の年次大会で報告することを目標に、調査結果をまとめ、報告の準備をしていく予定である。(本報告書 31 頁参照)

日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に 関する研究」

「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」

平成 28(2016)年度(研究代表者・苛原稔徳島大学教授)

【研究担当】仙波由加里(研究協力者·IGS 特任 RF)、上記課題研究分担者·久慈直昭(東京医科大学教授) 【研究内容】

日本医療研究開発機構成育疾患克服等総合研究事業「生殖補助医療の技術の標準化と出生児の安全性に関する研究」(研究代表者: 苛原稔)の研究分担として、東京医科大学の久慈直昭教授が「配偶子提供治療の枠組み構築・海外におけるカウンセリング・記録実態調査」を行っているが、その研究に研究協力員として参加している。本年度は、「生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会」の中で、慶應大学病院の看護師、坂中弘江と、根津マタニティークリニックのカウンセラー、渡辺みはる、国立成育医療センターの小泉智恵を招いて講演をお願いした。坂中は実際に AID を希望するカップルにどのような情報をどのように提供しているのかについて話した。渡辺みはるの勤務する諏訪マタニティークリニックでは、不妊カップルの夫の父親の精子を使っての体外受精を行っているが、渡辺はこの技術を実施するまえにどのようなカウンセリングや準備が行われるのかについて話した。小泉は日本生殖補助医療標準化機関(JISART)に所属するクリニックで実施した卵子提供で子どもを持った親に、真実告知の意識調査を実施し、その結果報告を行った。そのほか、小泉氏とドイツの Petra Thorn 氏が共同でおこなっている調査で、不妊クリニックのカウンセラーへのインタビューにも参加させてもらった。(本報告書32頁参照)

(Ⅳ)歴史・思想とジェンダー

IGS 研究プロジェクト「リベラル・フェミニズムの再検討」

【研究担当】板井広明(IGS 特任講師)

【研究内容】

本研究プロジェクトの目的は、ウルストンクラフトや J.S.ミルなど第1波フェミニズムあるいはリベラル・フェミニズム の思想・運動を再検討することにある。リベラリズムの公私二元論を前提にしたリベラル・フェミニズムは乗り越え の対象でしかないという捉え方が一般的だが、リベラリズムにおいて、「公」に対する「私」の領域は単に個人的 自由の空間であると放任されるのではなく、不正義が存在すれば介入が正当化される空間でもあった。本研究 では特に John Stuart Mill, The Subjection of Women, 1869 のテクスト読解を通じて、そのことを明らかにするとと もに、『女性の隷従』新訳を完成させ、リベラル・フェミニズム再検討の機運を盛り上げることを狙う。

今年度も翻訳作業は小沢佳史氏(神奈川大学非常勤講師)に協力してもらい、第1章について、英文の構造を チェックし、一文一文を丁寧に点検して、読みやすい翻訳文を目指し、ほぼ毎週オンラインで翻訳検討会を開いた。また秋からは J.S.ミルの女性論を専門にしている山尾忠弘氏(慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程)にも参加してもらい、テクストの知性史的背景などについても考慮しつつ、翻訳を進めた。

次年度はよりスピードアップして、翻訳検討を進め、また関連研究会の開催も検討している。(本報告書 36 頁参照)

IGS 研究プロジェクト「朝鮮戦争期の日系アメリカ人兵士と市民権を巡る諸問題:ジェンダーとエスニシティの 視点から」

【研究担当】臺丸谷美幸(IGS 特任 RF)

【研究内容】

■概要

本研究は朝鮮戦争(1950-1953)に参戦した日系アメリカ人をジェンダーとエスニシティの視点から考察するものである。特に今年度はアメリカカリフォルニア州でのフィールド調査を実施し、朝鮮戦争へ従軍した人々の志願動機や帰還後の生活の変化について考察した。フィールド調査では日系人朝鮮戦争退役軍人会会員に対するインタビュー調査を実施した他、同州内での資料収集を行った。今後、調査成果は投稿論文として発表するとともに、単著本刊行にむけた執筆を進めていく。

■ 今年度の成果・報告(招聘含む)

- 1. "Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian Nisei Soldier in the Korean War in From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada." Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University,大阪大学、平成 28 年 9 月 23 日 (招聘)
- 2. 「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍経験:ポストコロニアル的視座からの検討」ポストコロニアル法理論研究会 第4回研究会、明治大学、平成 28 年 11 月 21 日 (招聘)
- 3. 「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」、ジェンダー史学会第13回年次大会、武蔵大学、平成28年12月18日(査読あり)
- 4. 次年度 2017 年 4 月 15 日には、Annual conference of Association for Asian American Studies (AAAS): "Unknown Heroes: Japanese American Nisei Military Service during the Korean War and Their Citizenship" (平成 28 年 11 月 22 日採択)にて前年度成果を報告予定である。(本報告書 37 頁参照)

竹村和子フェミニズム基金「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争期の従軍経験:ジェンダーとエスニシティの視点から」

平成 27(2015)年 7月-平成 28(2016)年 6月

【研究担当】臺丸谷美幸(個人研究·IGS 特任 RF)

【研究内容】

本研究の目的は朝鮮戦争へ志願した日系二世の女性(二世女性)に着目し、1950年代における二世女性の社会進出と従軍経験との関係について検討することである。本研究の詳細な成果は、竹村和子フェミニズム基金のHPにて公開中である。(http://www.takemura-fund.org/data/2015/2015 report 4.pdf.)

■ 今年度の実施状況

- 1. 1950 年代の日系人コミュニティでの日系二世女性の従軍者に対する社会的イメージの解明のため 1950年代当時のエスニック・メディアの記事分析を行った。
- 2. 重要先行研究であるCynthia Enloe 著、Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives, (Berkley[CA]: University of California Press, 2000) に収録されている "Chapter 6 Nursing the Military: The Imperfect Management of Respectability"の邦訳を進めた。
- 3. 2016 年 5 月 1 日から 14 日まで米国カリフォルニア州にてフィールド調査を実施した。日系二世の退役軍人を対象としたインタビュー、及び UCLA 付属図書館、全米日系博物館での資料調査を実施した。
- 4. 上記の成果は、ジェンダー史学会第 13 回年次大会にて、「日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経

験と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視座から」(平成 28 年 12 月 18 日、於:武蔵大学)として報告した。 (本報告書 38 頁参照)

科学研究費若手研究B「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」

研究課題番号 16K16670:平成 28(2016)~平成 30 (2018)年度

【研究担当】臺丸谷美幸(研究代表者·IGS 特任 RF)

【研究内容】

本研究は、朝鮮戦争(1950-1953 年)へ従軍した日系アメリカ人に関する研究である。朝鮮戦争期の従軍は、従軍者であった日系二世の生活や社会環境にいかなる影響をもたらしたのかについてジェンダーとエスニシティの視点から明らかにすることを目的とする。

初年度にあたる今年度は、朝鮮戦争期の二世兵士における社会的イメージの解明を目指した。初めに日本国内で入手可能な『Pacific Citizen』や『羅府新報』など新聞記事を用いた資料分析、映画や小説を元にした二世兵士像の分析に着手した。さらに 2016 年 8 月 12 日から 9 月 3 日の日程で、カリフォルニア州でフィールド調査を実施し、ロサンゼルス近郊に在住する退役軍人に対するインタビュー、UCLA 附属図書館および日系人関連団体で資料収集を行った。調査期間中の特筆すべき成果として、ロサンゼルスの日系人街(リトルトーキョー)で開催される、日系人のお祭りである Nisei Week (2016 年 8 月 13-14 日)にて、日系人グループのパレードに参加する朝鮮戦争退役軍人会のメンバーと2日間全日程、行動を共にした参与観察ができた。今年度の成果は次年度に論文として学会誌に投稿を計画しており、最終的には単著としてまとめ、2019 年度内の刊行を目指す。(本報告書 39 頁参照)

外国人特別招聘教授による研究プロジェクト

The Changing Contexts of Family Life and Early Childhood Education and Care in Japan 【研究担当】スーザン・ハロウェイ(Susan D. HOLLOWAY・米・カリフォルニア大学バークレー校教授) 【研究内容】

As a visiting scholar at Ochanomizu University, I was able to pursue work on three research themes. The first theme concerns the economic and institutional conditions that affect Japanese parents' efforts to balance work with family activities. During my residence period, I worked on an empirical paper showing that Japanese men's potential earnings relative to that of their wives are a significant predictor of the couple's choices regarding work and family chores. I also organized a symposium that took place at Ochanomizu University on June 9. The symposium featured presentations by several well-known scholars on work, family, and individual well-being in Japan and Norway.

A second focus was to organize a follow-up to the study I published in my 2010 book, Women and Family in Contemporary Japan. This research examines the daily experiences of women who are parenting young children, looking particularly at their close relationships with spouse and professionals as a potential source of support. By comparing the original survey and interview data to a new dataset, I can identify how parenting discourses and perceptions have changed over the past 15 years.

The third project was to learn about recent changes concerning policy and practice in the early childhood care and education in Japan. I conducted informal interviews and conversations with leading members of the ECEC community in Tokyo and Osaka. I also visited four youchien (two national-university affiliated and two under private auspice), and three child-care centers (kodomo-en or hoikuen), as well as one parent-support center.

Women, Religion and Violence in International Perspective: Roles of Female Members in Aum Shinrikyō 【研究担当】エリカ・バッフェッリ(Erica BAFFELLI・英・マンチェスター大学准教授) 【研究内容】

The three months I spent at the Institute for Gender Studies were extremely stimulating and fruitful, both from the point of view of developing current as well as new research projects.

On October, 19, 2016, I organized an international symposium titled, "Women, Religion and Violence in International Perspective." The aim of the symposium was to discuss the involvement of women in radical political and religious movements, to consider different methodologies and approaches to the study of gender and conflict, and to foster a discussion on violence, terrorism and religion through the analysis of motivations, representations and re-elaboration of violent acts.

On December 14, 2016, a seminar titled, "Finding Your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions" was held at Ochanomizu University. The aim of the seminar was to discuss fieldwork from methodological and theoretical points of view, using my 15 years' experience of working with Japanese "new religions" (shinshūkyō) in Japan.

During my stay at Ochanomizu University, I started developing two new research projects:

(1) A new book project (with Professor Ian Reader, University of Manchester) that examines "new religions" or New Religious Movements (NRMs) in Japan in the modern era, with a prime focus on movements that became

widely known in the 1980s and early 1990s. And (2) a new research project on women, religion and violence. The project is part of a larger research network I am developing with Dr. Atreyee Sen (University of Copenhagen) investigating the participation of women in radical political and religious movements. In particular, my current project focuses on women (ex-) members of Aum Shinrikyō. Furthermore, I have worked on a new volume I will co-edit with Professor Fabio Rambelli (University of California, Santa Barbara) on critical terms for the study of religion in Japan (Bloomsbury). The volume will include more than 20 collaborators from universities from different countries, including Japan, the UK, the US, Norway, Canada, the Netherlands, Italy, and Germany.

After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan

【研究担当】ラウラ・ネンツィ(Laura NENZI・米・テネシー大学教授) 【研究内容】

My research project, titled After Dark, looks at the perception of the night in early modern Japan, with a focus on the nineteenth century. It then situates the case of late-Tokugawa Japan within a global context.

I contend that, despite the modern characterization of the Tokugawa period as an age defined by darkness and by a quaint closeness to the forces of nature, nineteenth-century depictions and accounts of nocturnal landscapes show that in the Tokugawa era the nighttime was treated as a moment apart, one to be dealt with cautiously.

One part of the project looks at the gendered implications of the night. In the realm of popular culture, gender informed the fears enticed by the night (for example in the case of female ghosts). For the authorities, controlling the nighttime and its spaces and activities was a way of buttressing the status system and of maintaining social order, which included the management of issues related to gender.

In Tokugawa Japan, controlling the nighttime necessitated the replication (and possibly even the reinforcement) of norms pertaining to gender and patriarchy. When tensions erupted (as with the eejanaika phenomenon of 1867), the night became the time when the hetero-normative rules enforced during the day came into question, ambiguity took center stage, and unorthodox behaviors became possible.

【資料】③協力研究者一覧

氏名·所属	協力事業*	参照
【アジア・オセアニア】		
ジョヨッティ・ゴーシュ	(シ)金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
ジャワハルラール・ネルー大学・印		
C・P・チャンドラシェーカー ジャワハルラール・ネルー大学・印	(シ)金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
キャサリン・ミルズ モナシュ大学・オーストラリア	(セ)The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
【ヨーロッパ】		
シルヴィア・ウォルビー ランカスター大学・英	(セ)The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
エリカ・バッフェッリ	特別招聘教授	111 頁
マンチェスター大学・英	(シ)女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考	56 頁
	(セ) Finding Your Place	90 頁
スーザン・ヒメルヴァイト	(研)アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
オープン大学・英	(研)社会的企業とジェンダー	19 頁
アートリー・セン コペンハーゲン大学・デンマーク	(シ)女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考	56 頁
カリン・ゴットシャル ブレーメン大学・独	(セ)The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
サンドラ・シャール ストラスブール大学/アルザス・欧州	(シ)モダン再考:戦間期日本の都市・身体・ジェンダー	65 頁
日本学研究所・仏	(連)ストラスブール大学/アルザス・欧州日本学研究所	122 頁
小野坂優子 スタヴァンゲル大学・ノルウェー	(シ)家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
【北米】		
マーニー・S・アンダーソン スミス大学・米	(シ)明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
ハイディ・ゴットフリート ウェイン州立大学・米	(セ)The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
メリッサ・デックマン	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
ワシントン・カレッジ・米	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁
ジュリー・ドーラン	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
マカレスター・カレッジ・米	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁

氏名•所属	協力事業	参照
ラウラ・ネンツィ	特別招聘教授	114 頁
テネシー大学・米	(教)博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース歴	116 頁
	史資料論特論「Gender Issues in Tokugawa Period」	
	(セ)The Lives of Samurai Women of the Edo Period	80 頁
	(セ)Gender, Food, and Empire	85 頁
	(シ)明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
スーザン・D・ハロウェイ	特別招聘教授	108 頁
カリフォルニア大学バークレー校・米	(シ)家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
	(セ) Family and Schooling in Contemporary Japan	71 頁
マリアン・パリー	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
デラウェア大学・米	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁
リンダ・M・ペレス	(セ) Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect	98 頁
ミルズ大学・米	Communication	70 A
堀口典子	(セ)Gender, Food, and Empire	85 頁
テネシー大学・米	•	
エイミー・リンド	(セ) Imagining a Postneoliberal Future	73 頁
シンシナティ大学・米		
ルーク・ロバーツ	(セ) The Lives of Samurai Women of the Edo Period	80 頁
カリフォルニア大学サンタバーバラ校・米 ユン ジソ	 (研)「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	24 頁
学振外国人特別研究員	(研)日本の地方政治における女性の政治的代表性の研究	27 頁
カンザス大学・米	(研)人口政策としての不妊治療支援に関する日韓の比較研究	33 頁
7回中1	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
【国内】	() D +) = 1	02 =
池尾愛子 早稲田大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
生垣琴絵	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
沖縄国際大学		70 70
石井紀子	(シ)明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
上智大学		
伊田久美子	(会)「フェミニスト経済学」研究会	124 頁
大阪府立大学	()) == + == +	
板橋晶子 中央大学	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
<u> </u>	(シ)金融化、雇用、ジェンダー不平等	50 頁
東京大学	(c) whall, (E) 11, (c) 4c) 1. 1. 4	<i>50</i> ×
岩本美砂子	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
三重大学	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁

氏名•所属	協力事業	参照
上村協子 東京家政学院大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
エリック・シッケタンツ 日本学術振興会/東京大学	(シ)明治期のジェンダー、宗教、社会改良	59 頁
大橋史恵 武蔵大学	(教)AIT ワークショップ	128 頁
岡崎まゆみ	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
帯広畜産大学	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
小川真理子 日本学術振興会/大妻女子大学	(シ)女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考	56 頁
兼子歩	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
明治大学	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
金野美奈子 東京女子大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
吉良貴之 宇都宮共和大学	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
久慈直昭 東京医科大学	(会)生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビー イングを考える研究会	124 頁
	(セ)AID 出生者のドナー情報を得る権利	69 頁
栗田啓子 東京女子大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
幸田直子	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
近畿大学	(セ)第1回「冷戦とジェンダー」研究会	79 頁
清水清美 城西国際大学	(会)生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビー イングを考える研究会	124 頁
スティール若希 東京大学	(会)政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(GDRep)	124 頁
高橋梓 東京外国語大学博士後期課程	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
武田興欣	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
青山学院大学	(セ)「慰安婦」問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
武田宏子	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
名古屋大学	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁
田中洋美	(会)日米女性政治学者シンポジウム(JAWS)	123 頁
明治大学	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
	(シ)なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?	62 頁

氏名•所属	協力事業	参照
崔世卿	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
早稲田大学		
根本宮美子	(シ)家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較	53 頁
京都外国語大学		
福永玄弥 東京大学博士後期課程/日本学術 振興会	(セ)台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開	88 頁
堀芳江 恵泉女学園大学	(研)アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
松尾瑞穂 国立民族学博物館	(シ)女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考	56 頁
松野尾裕 愛媛大学	(セ)日本における女性と経済学	93 頁
三浦まり	(研)女性の政治参画	26 頁
上智大学	(会)政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(GDRep)	124 頁
武藤香織 東京大学	(セ) The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
グレンダ・ロバーツ 早稲田大学	(研)アジアにおける「新中間層」とジェンダー	18 頁
山本めゆ	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
日本学術振興会/津田塾大学	(セ)「慰安婦」問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
【学内】		
石田安実 グローバル人材育成推進センター	(セ) Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication	98 頁
特任准教授	(セ)The Ethics of Prenatal Testing	83 頁
磯山久美子 非常勤講師	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
大木直子	(研)「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	24 頁
グローバルリーダーシップ研究所	(セ)The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
特任講師	(セ)JAWS 研究交流会	96 頁
カレン・シャイア グローバルリーダーシップ研究所 特別招聘教授	(セ) The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis	101 頁
土野瑞穂	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁
みがかずば研究員	(セ)訳者と語る『京城のモダンガール』	77 頁
	(セ)『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス	95 頁
宮内貴久 基幹研究院人文科学系教授	(会)「冷戦とジェンダー」研究会	124 頁

*(シ)シンポジウム、(セ)セミナー・研究会、(教)教育プロジェクト、(研)研究プロジェクト、(会)関連研究会、(連)国際ネットワーク

【資料】④国際シンポジウム・セミナー・研究会一覧

開催日イベント詳細参照

IGS 主催 国際シンポジウム

4/11 国際シンポジウム

50 頁

金融化、雇用、ジェンダー不平等

Financialization, Employment, Gender Inequality

【司会】板井広明(IGS 特任講師)

【報告】ジョヨッティ・ゴーシュ(ジャワハルラール・ネルー大学教授・インド)

「金融危機と女性の経済的状況」

C.P.チャンドラシェーカー(ジャワハルラール・ネルー大学教授・インド)

「アジアにおける金融と不安定性」

【ディスカッサント】伊藤誠(東京大学名誉教授)

【閉会の辞】足立眞理子(IGS 教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳)

【参加者数】41名

【成果刊行】IGS Project Series 10『金融化、雇用、ジェンダー不平等』

6/9 国際シンポジウム[特別招聘教授プロジェクト]

53 頁

家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較

Family, Work, and Well-Being in International Perspective

【司会】スーザン・D・ハロウェイ(カリフォルニア大学バークレー校教授・米/IGS 特別招聘教授)

石井クンツ昌子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)

【報告】小野坂優子(スタヴァンゲル大学准教授・ノルウェー)

「仕事と家庭と幸福感:ノルウェーと日本の視点から」

根本宮美子(京都外国語大学教授)

「日本における未婚男性の幸福と家族の変化」

【ディスカッサント】スーザン・D・ハロウェイ、石井クンツ昌子

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳)

【参加者数】78名

【成果刊行】IGS Project Series 5『家族、仕事、ウェルビーイングの国際比較』

10/19 国際シンポジウム[特別招聘教授プロジェクト]

56 頁

女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考

Women, Religion and Violence in International Perspective

【コーディネーター/司会】エリカ・バッフェッリ(マンチェスター大学准教授・英/IGS 特別招聘教授)

【基調講演】アートリー・セン(コペンハーゲン大学准教授・デンマーク)

「女性とラディカルな運動:ジェンダーと紛争についての新しい視点を得る」

【ディスカッサント】松尾瑞穂(国立民族学博物館准教授)

「Prof. Atreyee Sen の議論を受けて」

小川真理子(日本学術振興会特別研究員(PD)/大妻女子大学)

「日本における DV の加害者と被害者」

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳)

【参加者数】47名

【成果刊行】IGS Project Series 7『女性、宗教、暴力:国際的視点からの再考』

開催日 イベント詳細 参照

1/17 国際シンポジウム[特別招聘教授プロジェクト]

59 頁

明治期のジェンダー、宗教、社会改良:炭谷小梅と中川横太郎

Gender, Religion, and Social Reform in the Meiji Period: The Case of Sumiya Koume and Nakagawa Yokotarō

【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授)

【基調講演】マーニー・S・アンダーソン(スミス大学准教授・米)

「『ヤソがワシの色女を奪りゃあがった』: 中川横太郎と炭谷小梅、19世紀日本における生の変容」

【コメンテーター】エリック・シッケタンツ(日本学術振興会外国人特別研究員/東京大学)

石井紀子(上智大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】日英(同時通訳)

【参加者数】26名

3/18 国際シンポジウム

62 頁

なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?ジェンダーと多様性から考える 2016 年大統領選挙

How far have we come in equal political representation? Lessons from the 2016 presidential election in the US

【総合司会/ファシリテーター】申琪榮(IGS 准教授)

【特別講演】メリッサ・デックマン(ワシントンカレッジ教授・米)

「トランプ時代におけるジェンダー・ギャップ:2016 年大統領選で女性有権者の投票行動から何を学ぶか」

ジュリー・ドーラン(マカレスターカレッジ教授・米)

「女性大統領候補:2016年大統領選におけるジェンダーの役割」

【ディスカッサント】メリッサ・デックマン

ジュリー・ドーラン

武田宏子(名古屋大学教授)

申琪榮(IGS 准教授)

マリアン・パリー(デラウェア大学名誉教授・米)*悪天候により来日キャンセル

【ラウンドテーブル司会】田中洋美(明治大学教授)

【主催】ジェンダー研究所、JAWS(日米女性政治学者シンポジウム)

【後援】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【言語】日英(同時通訳)

【参加者数】136名

イベント詳細

IGS 共催 海外・国内シンポジウム

3/23~ 国際シンポジウム

モダン再考:戦間期日本の都市・身体・ジェンダー

65 頁

3/25

開催日

Reconsidérer le `modan' : La ville, le corps et le genre dans le Japon de l'entre-deux-guerres 【会場】ストラスブール大学・仏

【報告】イレーナ・ヘイター(リーズ大学・英)

「再びモダン・ガールについて:スペクタクルと主体性」

サンドラ・シャール(ストラスブール大学/CEEJA・仏)

「モラルな風刺の様相:漫画家によるモダン・ガール」

伊藤るり(一橋大学)

「沖縄のモダン・ガール現象:新興エリート層の娘たちとその新しい卓越感覚」

伊藤公雄(京都産業大学)

「モダニティとしての「集団」と「技術」:中井正一『委員会の論理』を手掛かりに」

イブ・カド(トゥールーズ大学・仏)

Budo vs. Sport: The Issue of the Body in the So-Called Modan Period

セップ・リンハート(ウィーン大学・オーストリア)

「日本は本当にそれ程モダンな国だったのか:「細君天下絵葉書」を通じて見た大正日本の夫婦関係への一考察」

フレデリック・エブラール(ストラスブール大学/CEEJA・仏)

「岡本一平:新聞社付属画家の目から見た時代」

スティーブン・ドッド(ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・英)

「宇野浩二の「夢見る部屋」におけるモダニズムの翻訳」

ジェラルド・プルー(セルジー=ポントワーズ大学・仏)

「旅行をしているモボとモガ:西洋へ行ってみる時の日本モダン」

クリスチャン・ガラン(トゥールーズ大学・仏)

[Modern or 'modan'? Schools and Schoolchildren in 1920s and 1930s Japan]

黒田昭信(ストラスブール大学・仏)

「もう一つの近代の超克:「国語」の「主体」とその運命」

足立眞理子(IGS 教授)

「銘仙と「入れ子状の近代」: 逸脱への欲望」

和田博文(東洋大学)

「十五年戦争下の女学生と、女性教養誌 むらさき」

【主催】ストラスブール大学日本学科、アルザス欧州日本学研究所

【共催】ジェンダー研究所ほか

シンポジウム

『「LGBT」差別禁止の法制度って何だろう?』出版記念トークセッション

66 頁

【出版報告】綱島茜(LGBT 法連合会事務局長代理)

【報告者・パネリスト】若林一夫(世田谷区人権・男女共同参画担当課長)

瀬尾かおり(文京区総務部ダイバーシティ推進担当課長)

齊藤静子(多摩市くらしと文化部平和・人権課長、TAMA 女性センター長)

【ビデオメッセージ】長谷部健(渋谷区長)

【特別報告】熊坂義裕(一般社団法人社会的包摂サポートセンター代表理事)

【活動提起】原ミナ汰(NPO法人共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク代表理事)

【司会】森谷佑未(LGBT 法連合会)

【パネルディスカッション司会】神谷悠一(LGBT 法連合会事務局長)

【開会挨拶】猪崎弥生(お茶の水女子大学副学長)

池田宏(特別配偶者法全国ネットワーク事務局共同代表)

【閉会挨拶】永野靖(LGBT 法連合会)

【主催】性的指向および性自認等により困難を抱えている当事者等に対する法整備のための全国連合会(LGBT 法連合会)、ジェンダー研究所

【参加者数】137名

開催日 イベント詳細 参照

IGS 主催 IGS セミナー

6/8 生殖領域シリーズ 1 AID 出生者のドナー情報を得る権利

69 頁

[生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会]

【コーディネーター/司会】仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)

【報告】久慈直昭(東京医科大学教授)

「医師から見た各国の AID 事情~ドイツ・イギリス・ベルギー等の状況」

仙波由加里

「AID 出生者のドナー情報を知る権利—英国・オランダ・ドイツ・米国の状況」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】22名

6/16 〔特別招聘教授プロジェクト〕

71 頁

Family and Schooling in Contemporary Japan: Foreign Perspectives and Research

(現代日本における家庭と学校教育:外国人研究者の視点と研究)

【コーディネーター】石井クンツ昌子(お茶の水女子大学教授/IGS 所長)

【講師】スーザン・D・ハロウェイ(カリフォルニア大学バークレー校教授・米/IGS 特別招聘教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】30名

6/30 Imagining a Postneoliberal Future: The Queer (Im)possibilities of Ecuador's Citizen Revolution

73 頁

(ポスト新自由主義の未来を想像する:エクアドル市民革命のクィアな(不)可能性)

【司会】本山央子(大学院博士後期課程ジェンダー学際研究専攻) 【講演】エイミー・リンド(シンシナティ大学教授・米)

【担当】足立眞理子(IGS 教授)、臺丸谷美幸(IGS 特任 RF)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】30名

7/27 生殖領域シリーズ 2 同性カップルの家族づくりと AID

75 頁

〔生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会〕

【司会】仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)

【報告】東小雪(LGBT アクティビスト)

「日本におけるレズビアンマザー」

青山真侑(にじいろかぞく 副代表)

「日本で子育てするセクシュアル・マイノリティ親」

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】85名

7/29 訳者と語る『京城のモダンガール』: 消費・労働・女性から見た植民地近代――コロニアリズム/ポストコロニアリズム/ネオコロニアリズムの射程と『女』の位置

77 頁

【コーディネーター/司会】臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー)

【講演】高橋梓(東京外国語大学大学院博士後期課程)

「京城の『モダンガール』とは誰なのか: 訳者として日本語版『京城のモダンガール』にかかわって」 姜信子(作家)

「私はいかにして植民地のモダンガールに出会ったか」

【ディスカッサント】足立眞理子(IGS 教授)

【主催】ジェンダー研究所

【参加者数】41名

【成果刊行】IGS Project Series 11『訳者と語る『京城のモダンガール―消費・労働・女性から見た植民地近代』』

 開催日
 イベント詳細
 参照

7/29 『京城のモダンガール:消費・労働・女性から見た植民地近代』 書評会

78 頁

【コーディネーター/司会】臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー)

【報告】板橋晶子(中央大学兼任講師)、磯山久美子(お茶の水女子大学兼任講師)、臺丸谷美幸、尹智炤(日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学準教授・米)、土野瑞穂(お茶の水女子大学みがかずば研究員)、岡崎まゆみ(帯広畜産大学専任講師)、吉良貴之(宇都宮共和大学専任講師)、崔世卿(早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員)

【応答】高橋梓(東京外国語大学大学院博士後期課程)

【主催】ジェンダー研究所

【共催】ポストコロニアル法理論研究会(代表:岡崎まゆみ)

【参加者数】19名(一般非公開)

10/24 「冷戦とジェンダー」研究会:第1回研究会/キックオフミーティング

79 頁

【司会】岡崎まゆみ(帯広畜産大学専任講師)

【話題提供】幸田直子(近畿大学専任講師)

A Social History of the Cold War

臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー)

「調査報告:日系アメリカ人朝鮮戦争従軍兵士によるトランスナショナルな記憶の構築」

(H27年度竹村和子フェミニズム基金助成活動報告)」

【ディスカッサント】兼子歩(明治大学専任講師)

【主催】ジェンダー研究所

【助成】JSPS 科研費 JP16K16670(若手研究(B))「日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入:ジェンダーとエスニシティの視点から」

11/8 〔特別招聘教授プロジェクト〕

80 頁

The Lives of Samurai Women of the Edo Period

(江戸時代の武家の女性たち)

【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授)

【講師】ルーク・ロバーツ(カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授・米)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】25名

11/10 生殖領域シリーズ 3 The Ethics of Prenatal Testing

83 頁

(出生前検査をめぐる倫理)

[生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会]

【司会】仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)

【報告】キャサリン・ミルズ(モナシュ大学准教授・オーストラリア)

Gender, Disability and Bodily Norms

武藤香織(東京大学教授)

「Ethics and Governance of Non-invasive Prenatal Testing in Japan」

【コメント】石田安実(グローバル人材育成推進センター特任准教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】12名

【成果刊行】IGS Project Series 9『The Ethics of Prenatal Testing』

開催日	イベント詳細	参照
11/25	[特別招聘教授プロジェクト] Gender, Food, and Empire: Eating the Other in Hayashi Fumiko's Novels and Naruse Mikio's Adaptation Films (ジェンダー・食・帝国:「他者を食べる」物語と記憶(林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に))	85 頁
	【コーディネーター/司会】ラウラ・ネンツィ(テネシー大学教授・米/IGS 特別招聘教授) 【講師】堀口典子(テネシー大学准教授・米) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】15 名	
12/12	GDRep 研究会 台湾におけるジェンダー主流化と女性運動の展開 [2016 年度 第1回「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会] 【司会】申琪榮(IGS 准教授) 【講師】福永玄弥(日本学術振興会特別研究員) 【主催】特定非営利活動法人アジア女性資料センター 【共催】ジェンダー研究所「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究会 【参加者数】30名	88 頁
12/14	「特別招聘教授プロジェクト〕 Finding your Place: Reflections on Doing Fieldwork on Japanese New Religions (立ち位置を理解する: 日本の新宗教フィールドワークからの考察) 【講師】エリカ・バッフェッリ(マンチェスター大学准教授・英/IGS 特別招聘教授) 【主催】ジェンダー研究所 【言語】英語 【参加者数】10名	90 頁
2/22	日本における女性と経済学 【司会】板井広明(IGS 特任講師) 【報告】上村協子(東京家政学院大学教授) 栗田啓子(東京女子大学教授) 松野尾裕(愛媛大学教授) 生垣琴絵(沖縄国際大学講師) 【ディスカッサント】池尾愛子(早稲田大学教授)*紙面討論者 足立眞理子(IGS 教授) 金野美奈子(東京女子大学教授) 【論点提供者】伍賀偕子(元大阪総評オルグ、元関西女の労働問題研究会代表) 【主催】ジェンダー研究所 【参加者数】28名	93 頁

開催日 イベント詳細 参照

IGS 主催 IGS 研究会

1/30 『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス:アメリカ合衆国の動向に注目して

95 頁

〔第2回「冷戦とジェンダー」研究会〕

【司会】山本めゆ(日本学術振興会特別研究員 PD)

【報告】土野瑞穂(お茶の水女子大学みがかずば研究員)

「アジア女性基金解散後の日本政府による『慰安婦』問題への対応:アジア女性基金フォローアップ 事業を中心に」

武田興欣(青山学院大学教授)

「『慰安婦』決議をどう読むか:アメリカ連邦議会研究者の立場から」

申琪榮(IGS 准教授)

「新刊紹介 山口智美他『海を渡る「慰安婦」問題:右派の歴史戦を問う』」

臺丸谷美幸(IGS 特任リサーチフェロー)

「慰安婦少女像建設運動を巡るローカルコミュニティの反応:アジア系アメリカ人を中心に」

【主催】ジェンダー研究所

【担当】臺丸谷美幸

3/16 JAWS 研究交流会

96 頁

生と医療のジェンダー政治学

【司会】田中洋美(明治大学准教授)

【報告】武田宏子(名古屋大学教授)

「政治課題としての日常生活」

仙波由加里(IGS 特任リサーチフェロー)

「Government Subsidized Project for The Cost of Infertility Treatments As a Population Policy in Japan」マリアン・パリー (デラウェア大名 誉教授・米) *悪天候により来日キャンセル=紙面討論者

Some Possible Scenarios for the Future of Women's Health Care in a Trump Administration

ジェンダーと政治的代表性

【司会】申琪榮(IGS 准教授)

【報告】大木直子(お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

[How 'Politics School' Promote Women's Participation in Politics in Japan]

ユン・ジソ(日本学術振興会外国人特別研究員/カンザス大学準教授・米)

「Who Speaks for Women and Why: Evidence of Substantive Representation in the Tokyo Metropolitan Assembly」

【コメンテーター】岩本美砂子(三重大学教授)

【主催】ジェンダー研究所

【言語】英語

【担当】申琪榮

開催日 イベント詳細 参照

学内他機関との共催セミナー・研究会

10/31 IGS セミナー

98 頁

Perinatal Mental Illness, Attachment, and Affect Communication

(周産期精神疾患、母子間愛着、および情緒的コミュニケーション)

【司会/コーディネーター】石田安実(グローバル人材育成推進センター特任准教授)

【講師】リンダ・M・ペレス(ミルズ大学 Abbey Valley 教授・米/臨床心理士)

【主催】グローバル人材育成推進センター、ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】30名

11/14 研究交流会

101 頁

The Knowledge Economy and Feminism after the Crisis: A Discussion with Gender Scholars Sylvia Walby and Heidi Gottfried

(シルヴィア・ウォルビー教授とハイディ・ゴットフリート教授との研究交流会―「知識経済」 と『Crisis』後のフェミニズム)

【司会】カレン・シャイア(デュースブルグ=エッセン大学教授・独/グローバルリーダーシップ研究所特別招聘教授)

大木直子(グローバルリーダーシップ研究所特任講師)

【登壇者】シルヴィア・ウォルビー(ランカスター大学教授・英) ハイディ・ゴットフリート(ウェイン州立大学教授・米) カリン・ゴットシャル(ブレーメン大学教授・独)

【共催】グローバルリーダーシップ研究所、ジェンダー研究所

【言語】英語

【参加者数】24名

協力機関企画シンポジウム

6/11 シンポジウム

103 頁

イスラーム・ジェンダー学の構築に向けて

【会場】東京大学東洋文化研究所

【主催】科研費「基盤研究 A イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」代表:長沢栄治

【共催】ジェンダー研究所、東京大学東洋文化研究所班研究「中東の社会変容と思想運動」

6/26 ジェンダー史学会シンポジウム

104 頁

ポスト「戦後70年」とジェンダー史:地域のジェンダー実践を思考の手がかりに

【会場】お茶の水女子大学共通講義棟2号館

【共催】ジェンダー史学会、ジェンダー研究所

【資料】⑤国内外共同研究•研究交流一覧

■ 国際的な共同研究・研究交流等

地域・国・機関	担当
	担当
【アジア・オセアニア】	
東アジア	
東アジア日本研究者協議会	申
韓国	
韓国ジェンダー政治研究所	申
ソウル大学日本研究所	申
ソウル大学国際問題研究所	申
台湾	
国立台湾大学	申
タイ	
アジア工科大学院大学(AIT)環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻	足立•申•板井
【ヨーロッパ】	
全欧	
European Consortium for Political Research	申
フランス	
アルザス・欧州日本学研究所	足立
ストラスブール大学外国語・外国文化学部日本学学科	足立
パリ第2パンテオン・アサス大学	板井
【北米】	
米国	
日米女性政治学者シンポジウム(Japan America Women Political Scientists Symposium)	申

■ 国内関連研究会・連携研究党

研究会·団体名	担当
「フェミニスト経済学」研究会	足立
政治代表におけるジェンダーと多様性研究会(Gender, Diversity and Representation(GDRep))	申
生殖医療で形成される多様な家族と当事者のウェルビーイングを考える研究会	仙波
「冷戦とジェンダー」研究会	臺丸谷
ジェンダー関連学協会コンソーシアム	IGS

【資料】⑥国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則

(平成27年3月25日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下「研究所」という。)に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究所は、グローバル女性リーダー育成研究機構に附属する研究所として、ジェンダーに関する総合的、国際的な研究及び調査を行うとともに、ジェンダー研究者の育成に資することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) ジェンダーに関する国際的研究及び調査
- (2) ジェンダー研究に関する教育研修
- (3) ジェンダー研究に関する文献・資料の収集および整理
- (4) ジェンダー研究に関する情報の提供
- (5) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 特別招聘教授
- (4) 研究員
- (5) その他学長が必要と認めた職員
- 2 研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。
- (1) 特任教員
- (2) 客員研究員
- (3) 研究協力員

(研究所長)

第5条 研究所長は、基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員である教授のうちから学長が任命する。

- 2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。
- 3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第6条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

2 研究員は、基幹研究院に所属する教員のうちから、学長が任命する。

3 研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第7条 客員研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

- 2 客員研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。
- 3 客員研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第8条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

- 2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。
- 3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第9条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、ジェンダー研究所運営 会議(以下「運営会議」という。)を置く。

- 2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。
- (1) 研究所長
- (2) 第4条第1項第2号に掲げる教員
- (3) 第4条第1項第3号に掲げる特別招聘教授
- (4) 第4条第1項第4号に掲げる研究員
- (5) その他グローバル女性リーダー育成研究機構長が必要と認めた者
- 3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。
- 4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
- 5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
- 6 本条に定めるほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 研究所の事務は、企画戦略課が行う。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成27年4月1日から施行する。
- 2 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究センター規則は、廃止する。

【資料】⑦国立大学法人お茶の水女子大学特別招聘教授に関する規則

(平成27年3月25日制定)

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則(以下「職員就業規則」という。)第4条第5 項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)のグローバル女性リーダー育成研究機構に置く研究所において雇用する特別招聘教授に関し必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規則において「特別招聘教授」とは、国際的に著名な研究者又は顕著な業績を有する研究者で、 グローバルな視野から本学の教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることを目的として、本学が常勤の 教員として採用する者をいう。

(選考)

- 第3条 特別招聘教授の選考は、教員人事会議の議を経て、学長が行う。ただし選考に係る審査は、基幹研究 院長に付託するものとする。
- 2 前項の規定にかかわらず、学長の戦略的人事による選考は、役員会の議を経て、学長が行うものとする。
- 3 前2項の選考にあたっては、国立大学法人お茶の水女子大学教員選考基準第1条の規定を準用する。

(定年•雇用期間)

第4条 特別招聘教授の定年は65歳とし、当該定年に達した日以降における最初の3月31日(以下「定年退職日」という。)に退職するものとする。ただし、学長が特に必要があると認める職員については、この限りでない。 2 前項の規定にかかわらず、学長が必要と認める場合には、5年以内の期間を定めて雇用することができる。

(給与及び退職手当)

第5条 特別招聘教授の給与は、国立大学法人お茶の水女子大学職員就業規則第4条第4項の規定に基づき年俸制を適用して雇用する教員の就業に関する規則(以下「年俸制適用教員の就業に関する規則」という。) 第2条第1号の規定に基づき採用された教員に関する同規則第6条から第13条の規定を適用する。

2 特別招聘教授の退職手当は支給しない。

(赴任及び帰国旅費)

第 6 条 特別招聘教授には、赴任及び帰国のための旅費を支給する。ただし、帰国のための旅費は退職後 3 か月以内に本邦を出発する場合に限り支給し、一時帰国のための旅費は学長が必要と認める場合に支給するものとする。

(就業等)

第7条 特別招聘教授の就業に関し、この規則に定めのない事項については、職員就業規則の定めるところによる。

2 特別招聘教授の給与に関し、この規則に定めのない事項については、国立大学法人お茶の水女子大学職員給与規程の定めるところによる。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、特別招聘教授に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成 27 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 この規則の施行後最初に採用される特別招聘教授は、この規則に基づき選考されたものとみなす。

附 則(平成27年10月23日)

この規則は、平成27年10月23日から施行する。

附 則(平成28年2月19日)

この規則は、平成28年2月19日から施行する。

【資料】⑧『ジェンダー研究』編集方針・投稿規程

《編集方針》

- 1. 本年報に論文、研究ノート、書評、ジェンダー研究所の事業に関する報告(研究プロジェクト報告等)、彙報の各欄を設ける。
- 2. 本年報の掲載論文は、投稿論文と依頼論文から成る。
- 3. 投稿論文は、投稿規程第4条により、査読の上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
 - 3-1 投稿論文1本に対して査読は2名以上で行うこととする。
 - 3-2 査読者は、原則として、編集委員会のメンバー、また必要に応じて学内外の専門分野の研究者から選定する。投稿論文執筆者が本学大学院生である場合にはその指導教官を査読者に加える。
 - 3-3 投稿論文には番号を付し、執筆者名は伏せた状態で査読を行う。
 - 3-4 査読結果は共通の査読評価用紙を用い、定められた基準により評価する。
 - 3-5 掲載決定日を本文末に記す。
- 4. 依頼論文、ならびにジェンダー研究所の事業に関する報告は、編集委員会で閲読し、必要に応じて専門分野の研究者の助言を求めた上、編集委員会が掲載の採否を決定する。
- 5. ジェンダー研究所の事業に関する報告のうち、編集委員会が論文として掲載することが適当であると判断した場合には、投稿論文に準じて査読を行った上、論文として掲載することがある。
- 6. その他各号の枚数、部数、企画等、年報の編集に関する諸事項は、編集委員会が検討の上、決定する。
- 7. 『ジェンダー研究』に掲載された内容は全てジェンダー研究所のホームページおよびお茶の水女子大学教育・研究コレクション TeaPot に登録、公開される。
- 8. 投稿論文や研究ノート等には、英文要約を添付する。200 語以内とする。
- 9. 投稿論文や研究ノート等には、その内容を的確に表すキーワードをつける。5語以内とする。
- 10. 翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。

《投稿規程》

- 1. 『ジェンダー研究』の内容は、女性学・ジェンダー研究に関する、学術的研究に寄与するものとする。
- 2. 投稿者は、原則として、本学教職員・大学院生・研究生・研修生・卒業生、本研究所の研究員、研究協力員、および本研究所長が認める本研究所の活動に関係の深い研究者(研究プロジェクト参加者、研究会報告者など)とする。
- 3. 投稿する原稿は未発表の初出原稿とする。
- 4. 投稿原稿は完成原稿とし、レフェリーによる審査の上、編集委員会が採否を決定する。
- 5. 投稿申し込みをした後で投稿を辞退する場合は、速やかに編集委員会に申し出ること。
- 6. 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。ただし、図・表その他が多い場合には、執筆者による自己負担 となることがある。
- 7. 掲載原稿は、抜き刷りを贈呈する。なお、それ以上の部数については、あらかじめ申し出があれば執筆者の自己負担によって増刷できる。
- 8. 原稿執筆における使用言語は原則として日本語または英語とする。日本語/英語以外の言語による投稿に関しては、編集委員会において検討する。
- 9. 投稿原稿は原則として、
- 9-1. 日本語の原著論文は注・図表を含めて 20000 字以内、

英語の原著論文は注・図表を含めて8000語以内、

- 9-2. 日本語の研究ノートは注・図表を含めて 15000 字以内、 英語の研究ノートは注・図表を含めて 6500 語以内、
- 9-3. 日本語の研究活動報告は注・図表を含めて 6000 字以内、 英語の研究活動報告は注・図表を含めて 4500 語以内、
- 9-4. 日本語の書評は 4000 字以内、英語の書評は 1600 語以内とする。
- 10. 日本語については当用漢字とし、現代仮名づかいを用いる。なお、引用文等に関して旧漢字、旧仮名づかい等の問題が生じる場合には、前もって申し出ること。
- 11. 論文等の提出時には、名前、論文タイトル(副題も含む)の英語表記も表紙に記しておく。 ただし、タイトル 等の英語表記は、確認のうえ編集事務局で変更する場合もある。
- 12. 図・表・写真および特殊な文字・記号の使用については編集委員会に相談すること。
- 13. 原則として原稿はワードプロセッサーで入力し、原稿を印刷したもの 2 部を提出すること。原稿のデータファイル CD-R 等の媒体に記録して、それを添付して提出のこと。
- 14. 図・表を使用する場合は、同一ディスクに別ファイルを作成する。
- 15. 本文、引用文、参考文献、注については、別に定める<『ジェンダー研究』執筆要項>に従う。
- 16. 翻訳の投稿に関しては、投稿者が原著者から翻訳許可の手続きを行い、許可取得後に投稿する。そのさい の費用に関しては投稿者が負担する。なお、翻訳投稿をする場合、原則として論文「解題」を行う。
- 17. 掲載論文の著作権はお茶の水女子大学ジェンダー研究所に帰属するものとする。転載を希望する場合には、ジェンダー研究所の許可を必要とする。
- 18. 他の文献等から図、表、写真などの転載を行う場合は、原則として投稿者が自らの責任において必要な手続きを行う。そのさいの費用に関しては投稿者が負担する。
- 19. 投稿論文や研究ノート等の最終原稿(※)には、
- 19-1. 英文要約を添付する。200 words 以内とする。なお、英文原稿の場合は、要約を日本語としてもよいが、 事前に確認のこと。
- 19-2. 内容を的確に表わすキーワードをつける。5ワードまでとする。
- (※)掲載決定後に修正した原稿を指す。

(2016年7月4日改定)

【資料】⑨ジェンダー研究所ウェブサイト プライバシー・ポリシー

- 1. 国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所(以下、本研究所)ウェブサイトでは本研究所のイベント 開催に際して、イベント参加申込者の個人情報(氏名等により特定の個人を識別できるもの)を、本ウェブページ 上にて収集することがあります。
- 2. 収集した個人情報はイベント開催における会場手配や安全確保、配布資料作成の参考として利用するものであり、本研究所のイベント開催通知以外では利用することはありません。
- 3. 収集した個人情報の管理は、ウェブ担当者が漏洩、紛失、改竄等に対する安全対策を行うことで保護し、その責任は本研究所所長が最終的に負います。
- 4. 本研究所では、プライバシー・ポリシーを改定することがあります。改定する場合は、当ウェブサイトでお知らせします。

附則

このプライバシー・ポリシーは、2015年7月1日から施行します。